



ズバッと!

Q&A

高齢女性に多い くも膜下出血

突然起こる激しい頭痛を伴うくも膜下出血。主に脳の動脈にできたこぶが破裂することで起こり、命に関わるケースも少なくありません。治療法や予防法などを甲府脳神経外科病院副院長で脳神経外科の恩田英明医師に聞きました。



おんだ・ひであきさん
日本脳神経外科学会専門医、日本脳卒中学会専門医。

甲府脳神経外科病院
副院長
恩田 英明さん



くも膜下出血とは?



くも膜下出血は、脳の表面にある太い動脈にできるこぶが破裂し、出血して起こる病気です。このこぶは脳動脈瘤と呼ばれ、動脈が枝分かれしている部分にできやすいのが特徴です。このこぶが破裂しない限りほとんど症状はありませんが、破裂すると意識障害やこれまで味わったことがない激しい頭痛が起こります。一方で脳梗塞や脳出血で起こりやすい手、足の麻痺症状は典型的ではありません。



くも膜下出血の治療法は。



一度破裂した脳動脈瘤は再破裂する危険性が高いため、開頭して脳動脈瘤の入口をクリップで止める手術か、カテーテルと呼ばれる細く長い管を血管に挿入して脳動脈瘤にコイルを詰める塞栓術で再破裂を防ぐ治療を行います。クリップで止める手術は、止血効果が高いですが、開頭するので患者さんの負担が大きいです。一方、コイルを詰める塞栓術は、手術時間が短く患者さんの負担が小さいです。どちらを選択するかは年齢や動脈瘤の大きさ、場所などにより判断します。



くも膜下出血はどんな人が発症しやすいですか。



一般的に、40～60代の働き盛りが発症しやすいと言われていますが、最近では高齢の女性にも多く見られます。家族にくも膜下出血になった人がいる方は注意が必要です。多量の飲酒や喫煙、高血圧も影響します。



脳動脈瘤を破裂する前を見つけることはできますか。



脳動脈瘤は、20人に1人が持っているという報告があり、脳ドックなどで行うMRA検査で複数見つかることもあります。症状のない未破裂の脳動脈瘤を緊急に治療することはありませんので、定期的に検査をして動脈瘤の形や大きさの変化を確認し、患者さんの年齢や状態などを踏まえ、治療が必要な場合はクリップで止める手術か脳動脈瘤にコイルを詰める塞栓術を行います。脳ドックなどを定期的に受診し、脳動脈瘤を早期に発見して適切な治療を受けましょう。